

オピニオン



論説委員

田原 直樹

マスクだ自粛だと、何をするにも窮屈で心がふさがる。息苦しい日々が続く中、ドイツのメルケル首相の言葉が胸を突いた。

「普段あまり感謝されない人々に感謝の言葉を贈らせてください」

スーパーのレジ係や棚に商品を補充する人への言葉。今、最も困難な仕事の一つを担って私たちの生活を維持してくれ、ありがとう、と。

国民に新型コロナウイルス対策を語った先月の演説である。生活者の視点を失わず、社会の隅々に目配りしているからこそ出る言葉だろう。医療現場で奮闘する人々への謝意ももちろん表した。

政治決断を透明にし説明するとした上で、高齢者と不必要な接触を避けることなど一人一人に貢献を求めた。「不要な人などいません。全員がが必要です」「私たちは民主主義社会です。強制ではなく知識の共有と協力によって生きています」。やさしい語りで連帯を呼び掛けた。

移動の自由は重要な権利だが、命を救うため今は制限が必要。旧東ドイツ出身の首相の苦悩を察して国民も共感したようだ。コロナ対策が評価され、支持率は上昇している。ネットで和訳も広まり「涙が出た」と、日本でも評判を呼ぶ。

米国のリーダーも頼もしい。大統領

リーダーの言葉

心に響くものがほしい



3月18日、テレビ演説するメルケル首相
(ロイター＝共同)

領ではない。ニューヨーク州のクオモ知事だ。連日の会見で最新データを示し情勢を説明する。渋る政府に食らい付いて、不足する人工呼吸器を提供させもした。説得力ある言葉と行動力は「リーダーシップの教科書」と評される。

他方、「戦時大統領」を自認するトランプ氏といえば、誇らしげに大きい事を言うが朝令暮改が目立つ。人々は不信を募らせるはずだ。

さて私たちの国のリーダーはどうか。安倍晋三首相は2月末以来、おとといの緊急事態宣言まで会見を重ねてきた。右に左に顔を向け、よどみなく言葉を連ねる。記者に語り掛けるかのようだが、実はプロンプターに浮かぶ原稿の字を追う。言葉は届くだろうか。

「あんなに言葉数を並べては…」
「もっと端的に明確に具体的に」。

宣言の夜、歌手小柳ルミ子さんがブログにつづっていた。同感である。

東京五輪の延期を表明した際にも違和感を覚えた。「コロナに打ち勝った証しとして聞くという言葉だ。レガシーを五輪に盛り込みたいらしい。『復興五輪』を掲げながら、それらしい内容は伴っていない。いよいよ『コロナ退治記念五輪』に宗旨変えるのか。

東京都の小池百合子知事も会見で強調した。「私からバツハ会長にお伝えしました。大会の成功にはまず人類にとつて見えざる敵である新型コロナウイルスに打ち勝つてこそだ」と

二人とも、わが手柄と言わんばかり。どちらの専売特許か知らないが政治的なパフォーマンスと映る。

ウイルスに「打ち勝つ」という表現を、感染症などの専門家は使わないそうだ。

国際保健学者の山本太郎さんも語る。野生動物が暮らす生態系など世界の隅々まで人間が開発し、踏み込んだことで新たな感染症を流行、拡大させた。『感染症のパンデミックはきわめて社会的な現象であり、その時代、時代を反映したものとなる』(中央公論4月号)。人類の歴史を大局的に見れば、ウイルスとは

「共生」するしかないようだ。

もちろん新型コロナウイルスが憎い。大切な人を奪っている。早く終息させたい思いは皆、同じだ。しかし威勢がいいだけの言葉はむしろ響く。

「打ち克つ」べきものがあるとすれば、人間の醜い部分ではないか。マスクを高値で転売したり、トイレトーパーを買い占めたりする自己中心的な行動である。

加えてもう一つ。この機に乗じ、勇ましい言葉を並べてみせるポピュリズムの政治は根絶したい。

ロックダウン(都市封鎖)の語を不用意に使った小池知事しかり、安倍首相の「コロナに打ち勝った証し」しかり。強い言葉は届くどころか、発言の意図は政治的思惑か功名心かと勘ぐらせるだけだ。

リーダーというなら心に響く言葉を聞きたいが、無い物ねだりか。